

□ 書き手の〈発想〉を読み取らせる教材

「文は人なり」ということばがあります。

このことば通りに私たちは、文章を読んでいると、そこに知らず知らずのうちにその文章を書いた人のことを思い浮かべていることがあります。

その文章の題名や題材から書き手の人柄や性格、ものの見方や考え方が感じ取れるからです。書き手のことを感じ取らせるのは、題名や題材からばかりではありません。その文章を形作っている表現技法や文章の組み立て方のすみずみからも書き手その人のことを感じさせられることがあります。

もちろん、文章というものはひとたび制作されたと、書き手その人から離れて独り立ちしていきます。文章を制作した実際の書き手は文章の中には存在できません。実際の書き手が存在したのは、その文章を書いていた時までです。

けれども、文章の中には、読み手がその文章を読んで感じている〈書き手〉、つまり、文章の中から取り出すことのできる〈書き手〉というものが存在するのです。

この文章の中から想定される〈書き手〉に迫っていくための大きな観点を〈発想〉と名づけておくことにします。

〈発想〉とは、書き手の中に芽生えた文章制作へのきっかけや目的のことです。さまざまなものの中から題材を見つけ出す過程やその題材を効果的に書き表していくための材料の取り上げ方、また、読み手に働きかけるための書き方の工夫などのことです。

このような観点は、文章を制作された結果から見ていくのではなく、その文章が制作されてきた過程から見ていこうとするものです。

一 文章制作へのきっかけ・意図

文章には、制作される種類によってさまざまな〈きっかけ〉や〈意図〉が含まれています。

そのきっかけや意図とは、書き手の心をとらえたものは何だったのか、どうしてそのような文章を書こうとしたのか、読み手に何を訴えようとしたのか、といったことです。

こうした文章制作へのきっかけや意図を一般的なことばで整理して取り出してみます。

- ① 人間の生き方やものの見方・考え方を具体的に描き出してみよう。
- ② ある事柄について説明し理解してもらおう。
- ③ 実験したこと、観察したこと、見てきたことを報告して参考にしてもらおう。
- ④ ある事柄について自分の意見を述べて訴えてみよう。

こうした文章制作へのきっかけや意図をあらかじめ想定して文章を読んでいくことで、読み手は書き手と同じ立場でその文章に関わっていくことができます。

なお、書き手の文章制作へのきっかけや意図を知るための手がかりになるものがあります。その作者・筆者についての紹介文やその文章に付いての書評など、あるいは同じ作者・筆者の書いた『随筆集』や『評論集』などが手がかりとなる場合もあります。

そして、最も手近な手がかりは、いうまでもなく、その文章の〈題名〉や〈本文〉そのものです。とりわけ、〈題名〉には、書き手の文章制作へのきっかけや意図が直接的にあるいは間接的に表されている場合が多いのです。

〈本文〉の場合は、説明文教材では、書き手からの問いかけや説明・解説の仕方におのずと文章制作へのきっかけや意図が表れていることが多いと言えます。

けれども、文学教材の場合には、直接その〈本文〉に書き手が現れることはありませんので、説明的文章の場合ほどには簡単ではありません。それでも、まったく不可能ということではありません。

では、実際の教材に即して見ていくことにしましょう。

文学教材の場合

(小学五年)

文学教材の場合、作品自体から作者の制作へのきっかけや意図を探っていくことは不可能ではないが、簡単なことではありません。

そこで、参考となるのは、その教材の原作本や同一作者の他の著作、教科書の『指導書』に掲載されている作者の書いた教材解説の文章です。

「わらぐつの中の神様」という教材については、この作品の作者である杉みき子がこの作品の制作意図について教科書の『指導書』の中で次のように述べています。

現在、子どもたちの生活の中にも、マスコミなどをとおして、さまざまな形の「愛」の話題がはいりこんできています。いずれはそれぞれ複雑な人生に立ちむかってゆかねばならぬ子どもたちですが、この時期にはぜひとも、単純で健康で素朴な愛のかたちにふれてほしい。そんな思いもあって生まれた筋書きでした。働くことを愛し、人の身になって考え、人間のぬうちは見てくれでなくて心だと思っているこの若者と娘が、私はいまでも好きなのです。

ここに「この時期にはぜひとも、単純で健康で素朴な愛のかたちにふれてほしい」と述べられています。これこそがこの作品の制作のきっかけ・意図であるといえましょう。

「わらぐつの中の神様」という教材を、作者のこのような制作のきっかけ・意図にしたがってみていけば、この作品の価値を物語に登場する人物「マサエ」「おばあちゃん」「おじいちゃん」「お母さん」「大工さん」「おみつさん」のものの見方・考え方に照らして読み取っていくことができるでしょう。

「一つの花」という教材では、作者の今西祐行がその製作のきっかけ・意図に関して複数の体験の組み合わせにあったと述べています。

一つ目の体験は、昭和二十六、七年頃の作者自身の家庭に実際にあったできごと、つまり、片言を覚え始めた幼い娘さんが「一つだけちようだい」と言えば、食べ物をもらえるということを知っていたということ。作者は、そんな娘さんをいじらしく思い、「いくら貧乏しても、この世

にだった一つしかないもの、それだけは与えてやらなければならぬ」と思ったというのです。二つ目の体験は、作者の軍隊生活時代にさかのぼります。戦友の中には父親の兵隊がたくさんいて、二度と愛児の顔を見ることもなく散っていった人がたくさんいたということです。

三つ目の体験は、作者が戦地から復員してきたとき、たまたま焼け野原の中に建てられていたみずばらしい家の周りにコスモスやオシロイバナが咲きほこっているのを見たこと。そして、その家に住む人のことを想い、また、親しい人を残して亡くなっていった戦友のことを想わずにはいられなかったといいます。「二輪のコスモスの幻想」が生まれたきっかけであったということです。

作者自身によるこのような三つの体験とその時の想いとが合わない合わされたところに、この作品の制作のきっかけ・意図があったことが理解されるのです。

説明文教材の場合

(小学二年)

説明文教材の場合は、文学教材と違って、筆者からの問いかけや説明・解説の中に直接文章制作へのきっかけや意図が表れていることが多いといえます。

「たんぼぼの ちえ」という教材があります。

この文章で述べられている内容の中心は、タンポポの花の軸とその種子をできるだけ遠くにまき散らすための工夫です。つまり、これは、植物が自分の命を守り、仲間を残していくという自然のあり方を述べた文章です。

野原のどこでも見ることでできるタンポポにも大変おどろかされるふしぎな力が備わっています。そのことを、読み手である子どもたちに分かりやすく説明して理解してもらおうというのが、この文章を書いた筆者の制作のきっかけであったとみなすことができます。

このような制作へのきっかけ・意図が直接表れているのは、「たんぼぼの ちえ」という〈題名〉です。「知恵」ということばは、普通には、人間や動物に特徴的なもので、しかも程度の高い動物に備わっているとみなされています。そうしたことばを野原のどこにでも見られるタンポポに使っているところに、筆者のこの文章の制作へのきっかけや意図が感じ取れます。

つまり、ありふれた野草にすぎないタンポポにさえも大変不思議な力が備わっていることに対する筆者のおどろきの気持ち子どもたちにも感じ取ってほしいという筆者の願いが「知恵」という言い方をとらせたものであるとみることができます。

【課題1】 「わらぐつの中の神様」を読んで、登場人物の描き方から作者のこの物語を制作したきっかけや意図について話し合ってみましょう。

【課題2】 「たんぼぼの ちえ」を読んで、この説明文を書いた筆者の制作のきっかけや目的について話し合ってみましょう。

二 題材・素材の選び方、とらえ方

文章には、書き手がさまざまなものごとの中から選び取った価値ある〈題材〉、効果的な〈素材〉が取り上げられています。

文章の中の題材・素材は、しばしばその文章の〈題名〉に表れてくるが、それを具体的に確かめられるのはやはり〈本文〉によつてです。

書き手が題材をどのようなきっかけから選び、この題材を効果的に展開していくための素材をどこからどのように取り上げているか、つまり、書き手のものごとに対する見方・考え方の中には、その書き手に独自の思考の展開が含まれています。

そこで、書き手の題材・素材の選び方やとらえ方を探ることで、文章の中から読み手がその文章を読んで感じてしている〈書き手〉、つまり、文章の中から取り出すことのできる〈書き手〉に迫っていくことを目指します。

実際の教材に即して、具体的に見ていきましょう。

文学教材の場合

(小学)

文学教材の場合、その〈題材〉は出来事や事件、あるいは人間関係、人間の生きる姿などです。

また、〈素材〉として選び取られているもので最も多いのは、登場人物としての人間です。もちろん、動物(「ごんぎつね」や鳥(「大造じいさんとがん」)、植物(「野ばら」「やまなし」)である場合もあります。その他、さまざまな事物が〈素材〉となります。

こうした〈題材〉や〈素材〉の選び方・とらえ方に書き手の〈発想〉があらわれてくるのです。

「わらぐつの中の神様」を例にみていきましょう。

この作品の場合、題材はいくつもあげることができます。

- ① マサエとお母さんとおばあちゃんとの三世代の人間のものの見方・考え方。
- ② おみつさんと大工さんの生き方。
- ③ わらぐつの中に神様がいたという話。
- ④ 若い大工さんの話。

こうした題材は、どのように選び取られたのでしょうか。

作者の杉みき子によれば、わらぐつの中に神様がいたという話は、古いメモ帳に書き留めておいた「ざるの中の神様」という東北地方の言い伝えの中から思いついたと述べています。なんとはなしに、このことばにひかれて心の中でころがしているうちに、「ざるの中に神様がいるなら、わらぐつの中にいたっていいじゃないか」ということであつたというものでした。「ざる」が「わらぐつ」に変わったのは、作者の故郷である雪国でのなじみ深い生活用具だったからです。

また、若い大工さんの話は、幼い頃に読んだ小川未明の童話「殿様の茶碗」の次のような話から触発されたものであつたといえます。

町一番の有名な焼物師が、殿様に茶碗を献上する。軽くて薄いことこの上なしという語句上品名のだが、无との様はその茶碗で食事をすると、手をやけどしそうな熱さに閉口するこの殿様がある時旅に出て百姓家に泊まると、そこのおじいさんが、ありあわせの厚手の茶碗に熱いおかゆを盛ってくれた。殿様はこの普通の茶碗のおかげで快く食事をすませ、いくら有名な焼物師でも、使う者の身になって使いやすく作るという〈親切心〉がなくては何の役にも立たないのだ、と感じ入る。

これらの話は、いずれも杉自身の読書体験から得たものでした。特に、後者の話が幼い頃の読

書体験によるものであった点は興味深いところです。

一方、〈素材〉の方はどのように選び取られたのでしょうか。

この物語の中で、「わらぐつ」について重要な〈素材〉である「雪げた」について、作者は次のような幼い頃のエピソードを述べています。

暗いがんぎの下の店さきに、赤い鼻緒の雪げたが、まるでそこだけ光り輝くように置かれている場面でした。むかし学校へのゆきかえりに、いつも見ていた情景です。そのころの子どもは、もうみんな長ぐつで、雪げたなどはく機会はありませんでした。それでもふと手を出したくなるほど、その雪げたは魅惑的に見えたのでした。

このように、作者自身の述べるところによって、〈題材〉という〈素材〉という、共に幼い頃の読書体験や生活体験に基づいて選び取られていることが明らかとなりました。

けれども、こうしたことは、作品そのものの中からは直接に読み取ることができません。そうはいっても、「わらぐつ」や「雪げた」などの〈素材〉については、これらが雪国に独自のものであることは理解できるでしょう。また、雪国のこたつでおばあちゃんの昔語りという〈題材〉からもこの物語の作者の生い立ちや生活環境を想像することができることでしょう。

このような〈題材〉や〈素材〉に基づいて作られたこの物語が、作者の生まれ故郷の風土や風景、あるいは、そこでの幼い頃の体験と深く結びついているのだということを理解することができるとは、きるでしょう。

【課題】 「わらぐつの中の神様」を読んで、〈題材〉や〈素材〉の選び方・とらえ方を手挂かりに作者のものの方の見方や考え方の特徴について話し合ったみましょう。

説明文教材の場合

(小学)

説明文教材の〈題材〉で圧倒的に多いのは、自然と人間との関係を扱ったものや、自然の仕組みについて説明したもの、動物の生態を説明したものなどです。

また、これらの外には、言語、文化、社会、歴史に関する題材などが選び取られています。

〈素材〉についても全く同様です。
よく知られた「ありの行列」という教材を取り上げて、こうした〈題材〉〈素材〉の選び取り方について見ていきましょう。

この文章では、「ありの行列」という〈題名〉が〈題材〉そのものを示しています。

本文の冒頭は、この題名を受ける形で〈題材〉を端的に提示し、この題材から筆者が触発された問題が設定されています。

夏になると、庭のすみなどで、ありの行列をよく見かけます。その行列は、ありのすからえさのある所まで、ずつつづいています。ありは、ものがよく見えません。それなのに、なぜ、ありの行列ができるのでしょうか。

最初の三文が身近な生き物である「あり」のつくる行列という、見過ごしてしまいがちな現象

を〈題材〉として取り上げたきつかけを述べています。

見過ごされがちな現象を〈題材〉として選び取っていること、ここに、筆者がこの文章における価値ある題材を見つけ出していたことが読み取れます。

また、この文章の〈素材〉には、もっぱら、アメリカのウイルソンという学者の研究が用いられています。具体的には、ウイルソンによるありの行列の観察・実験・仮説・検証・結論という研究の過程そのものが素材として選び取られているのです。

ですから、この文章の場合には、〈題材〉〈素材〉に関して、必ずしも筆者自身の独創的な発見が述べられているわけではありません。

むしろ、この文章では、普段は見過ごしてしまいがちな現象に目を向けるところから思いがけない発見が得られるのだということを示したところに、この〈題材〉〈素材〉を選び取った意図があったと考えるべきでしょう。

その意味で、この教材では、ウイルソンという学者が「ありの行列」という現象に着目し、その現象が起こる原因・理由を追求していく過程を読み取らせることで、同時に、こうした〈題材〉〈素材〉に着目した筆者の意図にも気づかせていきたいと思えます。

【課題】

「ありの行列」を読んで、〈題材〉や〈素材〉の選び方・とらえ方を手がかりに筆者のものの見方や考え方の特徴について話し合ってみましょう。